

全国草原再生ネットワーク ニュースレター

vol.61

Jun. 2025



全国草原サミット・シンポジウム現地見学会で訪れた茅葺き家屋（長野県小谷村）

年頭のご挨拶

全国草原再生ネットワーク会長 高橋佳孝

謹んで新春のお慶びを申し上げます。皆様におかれましては輝かしい新年をお迎えのことと存じます。

昨年は、10月4日～5日に長野県小谷村において「第14回全国草原サミット・シンポジウム in おたり」が開催されました。前回の第13回東伊豆大会は新型コロナウイルス感染症の拡大のためリモート開催でしたが、今回は6年ぶりに参加者が一堂に会しての対面での開催となりました。全国21都道府県から、延べ170名の参加者が北信濃の里に集い、活気に満ちた大会でした。

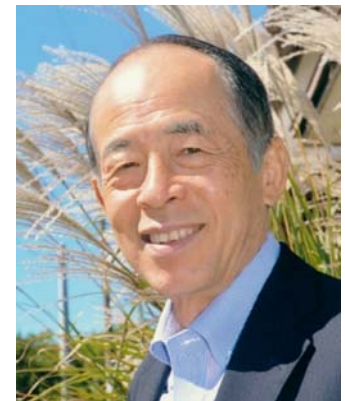
今回は「茅場（かやば）」をテーマにした初めての大会として、茅刈りや茅葺き作業の体験など、個性豊かな内容となりました。また、開催県外からの自治体の参加数が過去最多であり、草原の維持・再生への課題意識が自治体レベルでも確実に浸透していることを実感しました。参加者は、雪國小谷村の「茅場の文化」や「カリヤス草原の生態」に触れ、語り合い、研鑽する楽しさを十分に満喫されたことと思います。

当ネットワークの会員も大勢の方が参加され、久しぶりに会員どうしで交流や情報交換を行い、工夫や悩みを分かち合う貴重な機会となりました。次回の草原サミットは2年後に大分県九重町で開催される予定です。くじゅう連山の麓でまた会員の皆様とお会いできることを楽しみにしております。

また、2021年から始まった「未来に残したい草原の里100選」事業も回を重ね、第三次募集において草原の里5箇所が新たに選定されました。本年度までの3年間で総計53箇所の草原の里が認定されています。改めまして、本事業に対する皆様のご支援・

ご協力に厚くお礼を申し上げます

新しいニュースとして、草原サミット小谷大会が開催された長野県では1月に「NPO法人信州草原再生」という新しい組織が発足します。これまでに関係者が培っ



てきた知見と経験、情報網や人のつながりを生かし、信州を中心に中部日本における草原の保全・再生の機運醸成と活動の強化・発展が達成されることを心より期待しています。

私ども全国草原再生ネットワークは、今後も地域の多様な活動団体と手を取り合い、全国草原サミットや草原の里100選をはじめ、様々な普及・広報活動を通じて、全国の仲間作りを全面的にバックアップしてゆく所存です。

今年の干支は「乙巳（きのと・み）」、十二支では「巳年（へびどし）」です。へびは弁財天の使いとされていますし、巳年は新しい挑戦や変化に対して前向きな姿勢を示す年とも言われます。これまでの努力や準備が実を結び、成長と結実の時期となるよう、あせらず粘り強く取り組む姿勢を貫き、着実に前進していきたいと思っております。

皆様には、これまでと変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、巳年が皆様にとりましてたくさんの福を呼び込む良い年になりますよう、心よりお祈り申し上げます。

未来に残したい草原の里100選 2024年度の応募締め切り間近！

現在、2024年度に応募を受け付けています。締め切りは2025年1月10日です。まだ応募をされていない地域のみなさまは、ぜひご応募下さい。応募書類の準備にもう少し時間が必要な方、応募を検討しておられる方も、お気軽にご相談ください。

詳細はこちら <http://sato.sogen-net.jp/>



未来に残したい
草原の里
100選

第14回全国草原サミット・シンポジウム in おたり

2024年10月4日～5日、長野県小谷村の白馬アルプスホテルにおいて、「第14回全国草原サミット・シンポジウム in おたり」が開催されました。

基調講演、研究報告、現地見学会の様子をお伝えしたニュースレター10月号に続き、1月号では分科会、全体会、サミットの様子をお知らせします。

第1分科会「草原の生物多様性 -維持される仕組みに着目して-」報告

(富高まほろ：筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所
寺嶋悠人：筑波大学山岳科学学位プログラム)

はじめに

この分科会は白馬アルプスホテルの「ヴァンヴェール」会場で行われ、コーディネーターを信州大学教授の井田秀行氏が務め、約30名が参加しました。「草原の生物多様性 -維持される仕組みに着目して-」という研究報告が行われ、それに対する意見交換として活発な議論が交わされました。

1. 茅場利用の実態把握調査

過去から現在にかけて日本各地に存在していた茅場の現状を把握するため、全国1,718自治体に対して行ったアンケート調査の結果が高橋菜氏より報告されました。各自治体に対し、過去と現在で地域内に茅場として利用されている場所はあるのか、ある場合は場所、面積、管理者といつ頃まで利用していたかについてヒアリングが行われました。その結果、回答があった965自治体の中で、茅場があったとの回答があったのは290自治体であり、中でも現在まで茅場が継続していると回答した自治体の数は43自治体に留まっていました。一方で過去に存在した茅場が消滅したという回答があった自治体は171自治体にも上ったそうです。継続した茅場と消滅した茅場に地理的、社会的な要因は何か、アンケート結

果の解析を通して今後明らかにされることが期待されます。

この報告に対して会場で議論し、東日本に比べて西日本の方が温暖で茅場の消失が早い可能性や、東日本と西日本における茅場の利用方法の違いが影響を与えている可能性が指摘されました。その中で茅場という言葉が地域によって定義が違う可能性が議論されました。今回の結果は自治体の認識によるもので全国的な茅場の定義があるわけではないので、茅の出荷状況などから調査を行った方がより正確な分析になるのではないかと意見が出ました。

2. 茅場に生息する植物の長期モニタリング

茨城県妙岐ノ鼻湿原における植生の長期モニタリングと茅の利用者へのインタビューを通じた、茅場の植生が生産される茅に与える影響について結果が報告されました。茨城県稲敷市に位置する妙岐ノ鼻湿原はシマガヤと呼ばれる茅の産地ですが、現在では茅刈業者は一軒あるのみです。近年、この地域における茅の品質が低下しているとの指摘を受け、インタビューを通して植物の中で茅有用種と混ざっても問題の無い種、混ざると問題のある種を分類して、植物の長期モニタリングをされたとのことでした。



インタビューから、茅有用種としてカモノハシ、問題のある種としてチゴザサ・セイタカアワダチソウ・ノイバラが挙げられました。その結果を基に、古茅に含まれる植物の種組成調査や現地における植生調査の結果をモニタリングしたところ、2000年代を境に茅有用種は減少し、問題のある種は逆に増加していることが示されました。茅刈業者の減少や湿原付近の水位の上昇によって茅場の管理が行き届かなくなり、茅有用種以外の種の増加を招いたのではないかという報告でした。

またこの報告に対して茅の形質に関する議論がされ、かつてよりも均一な太さでない品質の悪い茅になってしまっていることから、茅の形質に関するデータを新たに集めてみると良いかもしれないと会場から意見がありました。

3. 茅場をめぐる新しい管理システム

全国的に課題となっている茅場をめぐる文化の衰退に警鐘が鳴らされていました。この問題についての解決策について会場の参加者を含めて議論が行われました。これまで茅に直接的な関係がないと思われていた業界の方とも積極的に連携していくことへの期待が挙げられました。高橋氏は、様々なバックグラウンドをもつ若手が茅場や自然に関わる機会として「若手の会」を発足しました。若手の会は現在3年目を迎えており、茅場の火入れや講座等のイベ

ントを行っています。若手がこうした活動に参加する上で、知っている人がいる、移動手段が確保されている、実際に体を動かせるといった3点が重要になるとの提言が出されました。また、新たにコミュニティの発足に期待が高まると同時に、一度できたコミュニティを長く続けることも非常に重要であるという議論がなされました。活動が長く続いている九重の自然を守る会によると、まず楽しい活動であること、無理な活動を要求するのではなく自分のペースで参加できるような場を作っていくことが秘訣だと心強いアドバイスが出されました。

この分科会を通じて、草原・茅場の未来のためには「多様な人」が「多様な目的」で「多様な関わり」ができるような場所・仕組み作りが重要であると結論付けられました。



第2分科会「茅刈と茅葺きを未来につなぐ」報告

(市野祥子：筑波大学山岳科学センター菅平実験所)

第2分科会は、白馬アルプスホテルの「アンジェ」会場で、茅刈と茅葺きを未来につなぐをテーマに開かれました。日本茅葺き文化協会事務局長・上野弥智代氏のコーディネートのもと、茅葺き職人の(株)小谷屋根・松澤朋典氏の講演があり、その後松澤氏に質問する形をとりながら、意見交換が行われました。参加者は30名ほどで、村民・学生・環境活動家・環境省職員・茅葺き民・茅場管理人・野焼き実行委員など、様々なバックグラウンドを持っていました。

松澤氏の講演では、故郷の小谷村に帰って茅葺きの仕事を継いできたことを踏まえ、現在の小谷村の茅刈りと茅葺きの事情、将来に向けての課題、それらに対する取り組みのお話をお聞きしました。小谷村の茅刈りの特徴は暮らしとともにあるという

ことでした。茅は4つの茅場から採集していること、その他に必要なものは山で採ってくる地主さんや林業関係者から購入していること、通常捨てているものがちょうど良いこと、木を間引きながら山を使いながら荒らさないこと、暮らしと山を両方維持することが茅刈りだということをお聞きしました。春は、野焼き・畑(茅屑は畑へ)、夏は屋根葺き、秋は茅刈り・材料調達、冬は茅拵えと、一年を通して暮らしと茅が一体になっていることが分かりました。小谷村の屋根の特徴は、豪雪地帯に耐えうるように作り込まれており、屋根はしっかり詰め、何層にもし、屋根の勾配をできるだけ急にするということでした。また茅刈り・茅葺きの課題として、高齢化、刈り子の確保、置き場の確保、道具等の開発が無い、技術習得に時間がかかる、が挙げられました。これらの課



題への解決策として、小中学生と一緒に茅刈りしていること、高校スキー部の活動で茅を搬出していること、キャンピング協会との連携、全国の職人の研修・受け入れ、茅のアート作品の作成、林業従事者を増やしつつ林業と両立をはかるなどの様々な取り組みが紹介されました。

この講演の後の意見交換では、様々な立場から意見が出ました。松澤氏の手の大きさと発達ぶりや山の暮らしそのものに適した体をされていることに驚き・感心する意見がありました。また、茅葺き屋根の良いところについて議論が行われ、すべて自然のものであること、維持管理が自分で全部できること、屋内で雨音がしないこと、優れた断熱材であること、家の中で火が炊けること（災害のたびに思う）、茅屑を畑で利用することで作物がおいしくなること、里山が守られること、が整理されました。茅場が一つあれば、その周辺の暮らし、生態系がすべてつながっており、循環して守られることや、刈った茅は何十年の間利用されて将来に向けて残っていくという見方が新鮮でした。



茅場の人手不足の問題に対しては、少しずつではあるけれどトレイルランナーなどを中心に若い人が茅刈りに参加してくれることが増えているということでした。通えないけど、興味はある人は多いようです。また若いお母さんなど、空き時間に茅刈りしてくる人も多く、コミュニティーでの場として楽しんでもらっているということでした。茅刈りウィンタースポーツ計画という意見もできました。例えばスピードや美しさを競う、男女差がない、簡単なようでちょっと難しい、没頭する楽しさがあるという意見でした。

この分科会への参加を通して、使って育てるのが茅刈りであり、保全のための保全ではないことを理解しました。茅の利用方法は屋根や肥料などある程度限られてはいるけれど茅刈りから得るものは、茅の調達、スポーツ、おしゃべりの場など、人それぞれで多様で良いという見方がとても印象に残りました。松澤氏、参加者ともに、茅刈り・茅葺きが好きで、この文化を守りたいという思いが伝わる素敵な会になったと思いました。

第3分科会「草原の管理技術を学び伝える」報告

(田中 健太：筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所)

この分科会は白馬アルプスホテルの「あずみ野」会場で行われ、30名ほどの参加者が円状に並べられた椅子に座ってお互いに向き合って、草原管理について話しあった。今回の草原サミット・シンポジウムの特徴として、開催地である小谷村を意識して茅場草原が主題となっており、本分科会でも茅場草原の管理方法や将来についての議論が中心となった。

はじめにコーディネーターである東京農業大学地域環境科学部教授の武生雅明氏から、小谷村とのかかわりについて紹介があった。元々は、大雪山・北岳とならぶ高山植物のホットスポットである白馬連





峰に調査研究のために通っていて小谷村を通過していた、ある年に風吹岳に行く途中に池原（いけばら）という集落を通り本当にきれいだった、棚田の土手にフクジュソウ・ヤマエンゴサク・ミミナグサ・カタクリ・アズマイチゲ・キクザキイチゲなどが咲き乱れていた、それから小谷村に魅せられ、長年通うようになったということだった。また小谷村の特徴として、中央部に糸魚川・静岡構造線が走り、その西側は地滑り規模と地形の空間スケールが大きく茅場の規模も大きい、東側は地滑り規模が小さく地形が細かく茅場の規模も小さかった、そのうち西側の茅場の一部が現在も残っているが、それ以外の茅場は森林化して失われてしまったということだった。小谷村の茅場に特徴的なのはカリヤスが優占していることだが、カリヤスは蛇紋岩の土砂移動地・雪崩地に自然分布がある超貧栄養地のストレス耐性種で競争力が弱く、そうした種が火山灰土壌の茅場で優占するのは不思議なことであり、相当な管理努力の産物ではないかということだった。分科会後の筆者との議論では、高標高という立地、多雪という気候、雪国に住む人々の勤勉な性質による徹底的な火入れやヤマハギ除去などの草原管理が、カリヤス優占の鍵ではないかと整理してくださった。

コーディネーターに続いて、2名の方から小谷村の事例紹介があった。一人目は親沢北観光委員会・千国地区の栗田優氏で、牧の入茅場の中で千国地区が管理を担当している区域についての紹介だった。千国地区では、最後に一軒残っていた茅葺き屋根の住宅が茅の葺き替えではなくトタンをかぶせることを選択した、茅葺き屋根のために野焼きを続けてきた茅場だが集落としては野焼きを続ける意味がなくなってしまう、集落以外からの茅の需用が多少はある、今後は茅場維持の新たな意義を見いだしていく必要がある、ということだった。



二人目は雨中（うちゅう）林野組合・雨中地区の荻沢隆氏で、シヨクの茅場についての紹介だった。ここは白馬コルチナスキー場に隣接しており茅場の一部はスキー場のゲレンデとして利用された履歴があるが現在はスキー場利用されていない。雨中地区は現在は小谷村役場があるところだが、歴史的に見ると小谷村の中では比較的新しい地区であること、現在は移住者が多いこと、祭りの運営を若者が行う習慣があること、飲むのが好きな住民が多いこと、茅の販売など茅場管理の経済的な意義についても今後考えて行きたいこと、現在は火を付けることに生きがいをもって飲み会を楽しみにしている住民が多いこと、の紹介があった。

その後に会場参加者に発言が求められ、各地の茅場・草原の管理事例の紹介が下記のように相次いだ。

- ・群馬県水上町では、11haの茅場から茅の出荷をして参加者の日当以上の収益があるほか、スキの種子も緑化資材用販売に販売している。野焼きはボランティア中心で消防団に協力を求めている。
- ・京都府美山町では、茅葺き職人が自分達で茅を調達している。現在はスキの茅が中心だが、以前は美山でもカリヤスの茅が主に用いられていて、稜線上にカリヤスの茅場があったが現在は森林化してしまった。現在茅の需用は多く、スキ茅の価格も上がっている。カリヤスの茅は市場で全く流通しておらず価格はついていないがスキ以上の価値がある。
- ・静岡県東伊豆町では、細野高原の野焼き費用の一部を、火入れ観光と山菜狩りの入山料で賄っている。地域おこし協力隊にも協力してもらっている。
- ・広島県芸北では、NPOが行っている芸北茅プロジェクトで、地元の教育委員会・中学校が中心となって地域内の茅束を調達してそれを販売する

ことで利益を上げている。

- ・長野県菅平高原では、かつて茅場やスキー場として草原が維持されて希少植物のムラサキが生き残っている場所がスキー場のゲレンデ縮小によって森林化したところを、有志が森林伐採と笹刈りを行って草原を再生し、NPO が中心となって茅束生産と出荷を行っている。中学校とも連携して授業の一環として茅刈りを行って教育にも活用している。
- ・大分県くじゅうでは、安全に火入れを行うために防火帯を作成するための輪地焼きに、ボランティ

ア総勢 100 名以上が協力している。

- ・長野県開田高原は、もともとは草は馬に与える物で屋根は板を使っていた地域。現在、馬を飼いに移住した人がいて、地域内に馬のために草を刈る活動がある。

遠方の様々な地域から草原管理の当事者が多数集まって、自分事として熱心に議論に参加していることがとても印象的だった。年齢的にも若手から年輩者まで幅広く、大勢の参加が有り、活気のある草原シンポジウム・サミットだった。

第 4 分科会「草原資源を地域に生かし、次世代につなぐ」の報告

(入江瑞生・土井結渚：筑波大学山岳学位プログラム)

この分科会は白馬アルプスホテルの「アルプスホール」会場で行われ、東京農業大学地域環境科学部教授の町田怜子氏がコーディネーターを務め、約 40 人が参加しました。はじめに小谷村中学校 3 年生の生徒から歌のプレゼントがありました。この生徒の皆さんは、中学 1 年生の時から 3 年間、草原・里山・高齢化の視点で小谷村の草原資源の特長・課題を深めてきたということです。その研究活動の集大成を 4 つのテーマで発表してくれました。その後には生徒と参加者が 4 つのテーマごとに分かれて、テーマごとにワークショップ形式の意見交流がありました。

発表内容 1 ～わらびに付加価値を！～

江戸時代、小谷村のワラビの塩漬は江戸幕府への献上品となるほど質が良いものでした。カヤ束の中に他の植物が入ると、カヤが腐り後で取り除くなどの手間が増えます。昔から行われてきたワラビ採りは、秋に収穫するカヤ束のなかにワラビが入らず、副次的にカヤの質向上に役立ちます。生徒たちが収

穫したワラビは 30kg (1 万 2 千円) となりました。さらに小谷のワラビの良さを人々に知ってもらうために、ワラビのおこわ・ナムルなど 5 つのメニューを生徒は考えました。そして道の駅でメニューを採用してもらえよう打診しています。

発表内容 2 ～草原の魅力を発信する！～

現代は多くの方が TikTok をはじめとする SNS を活用しているため、小谷の魅力を若者に発信するために生徒は動画を作成しました。小谷村人口は減少していて、2050 年には消失する可能性がある市町村に選ばれてしまいました。著者達の感想として、茅葺の良さ、ワラビ採りの楽しさが分かる動画でした。

発表内容 3 ～里山にとって養蜂はどれだけ重要なのか～

里山は利用が減っています。生徒たちは昔から里山利用をしている養蜂家へ見学に行きました。ミツバチは送粉の担い手として野菜の受粉・結実に貢献しており、ミツバチは里山の維持にとって重要です。しかし養蜂は費用対効果が高く、技術が必要であるなどの理由で、水田の利用等の他の方法が里山の維持にとって重要かもしれないと、生徒は参加者に問いかけました。

発表内容 4 ～高齢化について考える～

65 歳以上の高齢者数は昭和 35 年～令和 6 年の間に 28.6% 増加し、小谷村の一つの課題となっています。生徒は認知症サポーター研修を受け、実際に小谷村の高齢者のお宅 6 軒に訪問しました。そして、



郷土料理を習い、農作業・輪投げなどのゲームをするなど一緒に時間を過ごしました。生徒は今後の課題として高齢化による担い手不足や人口減少による空き家の問題を挙げました。

ワークショップ・まとめ

参加者からは、採ったワラビを道の駅で販売するだけでなく学校給食で使い地産地消を絡めると良いのではないか、動画をつくり SNS で情報を広げるというのは若者らしい、小谷村に U ターンで帰ってきてほしい、という意見が出されました。この分科会への参加者の間で小谷村には草原の豊かな資源や機能があることが共有されました。茅場の恵は世界発信も可能なほど豊かなものであることが最後に指摘されました。

中学生が地元について机上だけでなく現場を見ながら学べる魅力的な授業を受けることができる環境が小谷村にはありました。ただ、高校進学に伴い、隣村の白馬村よりも遠い松本や長野の高校に行き村から出て行ってしまうという現実を私たちは知りました。地元を少しでも学べるうちに知り、いつか村に帰ってきてほしいと思いました。



全体会の概要

(増井太樹：公益財団法人阿蘇グリーンストック)

10月4日の分科会後に全体会が行われました。それぞれの分科会のコーディネーターに加え、全体会のコーディネーターとして高橋佳孝氏が登壇されました。

第1分科会からの報告

まず、第1分科会のコーディネーターを務めた井田氏が概要説明を行いました。

第1分科会では「草原の生物多様性—維持される仕組みに着目して—」というテーマで高橋菜氏の事例報告ののち、議論をおこないました。3つの話題があって、1つ目はアンケート調査にもとづく茅場の実態調査についての発表、2つ目は妙義ノ鼻草原における茅場及び茅の評価、3つ目は茅の利用の未来についての発表がありました。1つ目2つ目は研究発表で活発な議論がありました。3つ目は保全の視点（生物多様性を守るためにどうするかという視点）よりも、利用の視点（茅場として管理することで付随的に生物多様性が保たれてきた）で生物多様性が保たれるのが理想的な姿ということで、どうす

れば良い社会のしくみが築けるのかということで会場からも事例が報告されました。分科会全体を通して印象的なことは高橋菜氏自身が若手の会を立ち上げて、茅場の火入れとか茅刈りとかに参加する場づくりを実践しているという点でした。多様な人が、多様な目的で、多様な関わりをできる場所を作ろうというのが印象に残りました。属性が違う人がどう接点をもつかそういった中で、結論めいたところはないが最終的には、場づくりのためにできることを



それぞれが小さく実践していこうという結論となりました。

第2分科会からの報告

続いて、第2分科会のコーディネーターを務めた上野氏が概要説明を行いました。

第2分科会では茅刈りと茅葺きを未来につなぐというテーマで発表いただきました。小谷村では4つの茅場でカリヤスが2万束とれる茅場がまだあるということ、茅葺きに使う材料採取も茅葺職人が行い地域の自然もよくなるという取り組みの事例を紹介いただきました。小谷屋根の職人の松澤氏からは多雪地帯に対応した葺き方をしているけれども、中々習得に時間がかかる課題があること。今では白馬高校の学生さんがトレーニングとして茅出しをやったり、アクティビティの一環で茅刈りをやったり、堅穴式住居を作る授業の中で茅を使ったり、アート作品として道の駅で茅を展示して子供たちが自分たちの故郷で刈った茅をずっとみれたり、ただ新しいものというだけではなく、ふるさとづくりとやってやっていると紹介いただきました。意見交換の場では茅葺きのメリットは何ですかという質問があったが、単なる屋根ではなく、地域の循環の中に関わっている良さという発言、住んでる方からは心地よさという発言、懐の深さのある建物だという発言がありました。結論としては茅刈りや茅葺きの良さや特徴をもっと言語化して分かるようにしないとという課題が浮かび上がりました。

また、関わる人をどのように増やすのかという質問も出ました。茅刈りをスポーツととらえるとか、茅葺きはとにかく楽しいという、一緒に楽しむという視点が大事という発言もあり、茅刈りから茅葺きまでのつながり・総合力がすごい！もっと伝えなければという点や、恩恵がいろいろあるので自治体も補助できる部分がたくさんあるのではないかという意見が出ました。

第3分科会からの報告

続いて第3分科会のコーディネーターを務めた武生氏が概要説明を行いました。

第3分科会では「草原の管理技術を学び伝える」をテーマに牧の入茅場の方や雨中シヨクの茅場の方から、苦労話を聞きました。それぞれの方から過疎の課題だけでなく、対照的な部分もあり興味深い議論となりました。「牧の入茅場」は昨年茅葺きの住宅



がなくなったのでどうやってモチベーションを維持していけばいいのかという課題もありつつ、90件近い地権者が茅場のメリットとかも考えずに当たり前のこととして地区で茅場が維持されてきたメンタリティが特徴的でした。「雨中シヨクの茅場」は移住者が多く、入会権も移住者が持つことができおり、元々いる地域住民と移住者など様々な人が関わりながら茅場を維持している、お酒を飲むための一つのイベントとしての意味付け、地域交流の場として火入れがあるというのも面白い視点でした。さらに茅場の維持管理だけではなく、水路の管理などで交流する中で地域の伝統や風習などを若い人たちに伝えたり、教育することができおり、そういう時間としても茅場の維持に意味があるという意見、地区運営としての視点や、教育、観光、茅材など、多様な視点があり、それぞれの地域としてモチベーションをどうやって維持するかという課題を全国の人と共有できました。

第4分科会からの報告

最後に第4分科会のコーディネーターを務めた町田氏が概要説明を行いました。

中学3年生が茅葺屋根の葺き替えや養蜂、福祉、



草原での現地体験等を授業として実施してきたので、その成果発表を4つ行いました。1つ目の班は食の恵みということでワラビを多くの人に食べてもらいたいという提案で、メニューを提案するなど実践的な内容でした。2つ目は情報発信として、SNS等の活用や動画の作成等を実施し、若い力が発揮されていてすぐに使えそうな動画に仕上がっていました。3つ目はミツバチの養蜂の提案、4つ目は高齢化問題について、高齢者と一緒に食事や農業体験、草原管理も一緒にすることで次世代に引き継げるのではないかという提案がありました。それぞれの発表を通じて子供たちの目線から見た草原の恵みを生かしていくということ、これだけ地域の故郷のことを考えている子供たちがいざれどうやったら小谷村に戻ってくるかなということにも思いをはせる内容となりました。

全体での意見交換－草原の価値の継承

続いて全体コーディネーターの高橋氏からそれぞれのコーディネーターに「草原の価値をどう継承するか」という点で質問がありました。

第1分科会の井田氏からは、「多様な人が多様な目的で多様なかかわりで守る」ことが重要という発言がありました。現場にいらなくてもいいんだよ、できることがあるんだよという緩いつながり、SNSで「良いね」するだけでもいい、価値観が広がっていくことが重要ということ、そういう場づくりに力を入れていくこと、あきらめずに時代が追いつくまでやり続けることが重要という発言がありました。

第2分科会の上野氏からは、プロフェッショナルだけでなく、いろんな関わり方の人、地域住民はじめ、皆さんのもとに知恵と技が戻ってくるような、職人や古老だけが暮らしの技と知恵をもっているだけじゃない世界、実感できる仕組み、関わりを増やしたいとの発言がありました。

第3分科会の武生氏からは、いろんな地区の情報交流が大事だと思った、茅場を運営している地域と茅を刈る人とのコミュニケーションがもっと取れれば利用も進むのではという発言がありました。

第4分科会の町田氏からは、子供たちが思い切った情報発信をしてくれた、実際に茅葺に住んでいる子供もいて心強かったという発言がありました。

続いて全体コーディネーターの高橋氏から、行政の人にどうかかわってほしいかという質問がありました。



第1分科会の井田氏からは、自然を守ってほしいと思うが文化を守らないと自然は守れないと思っている、自然の恵みを生かした文化が廃れている、文化を引き継ぐことに補助がきちんとあればいいと思っている、そのことで結果として健全な生態系になればいいと思うという発言がありました。

第2分科会の上野氏からは、「草原と茅葺文化の基本法」、茅場や茅葺の技術、文化が国民にとって大事だということを法律で大きく位置付けてほしいという思いを持っている。自治体の皆さんが補助を出す理由は本当はいくらでもあるので、環境に寄与しているという視点で補助を出しますということもあっていいと思う。山火事防止のために野焼きをするとかそういったことに補助金を出すとかそういうことができればいいと思うという発言がありました。

第3分科会の武生氏からは、社会教育が不足している中で、かつてはお祭りの中で子供相撲など地区行事の中で人を育てるということが行われていた、そういったものが少なくなる中で総合教育などを活用して里の暮らしの学びが深まればいいし、草原学習として修学旅行等としても草原を活用するとか、教育として草原への注目、補助も期待したいという発言がありました。

第4分科会の町田氏からは、今回の分科会では食の恵みについて調べた子が多く、地産地消の観点からも普及効果が高いと感じた、学校教育と草原学習の関わりとか、子供たちが地域に戻ってくる仕組みができればいいと思うという発言がありました。

全体での意見交換－今後の抱負

最後に全体コーディネーターの高橋氏からみなさんへ、今後の抱負について問いかけがありました。

第1分科会の井田氏からは、ずいぶん長く小谷の草原に関わってきたが、本当にありがとうございますという気持ちに尽きるが、今回大きなサミットが

できて、深い充実した関わりができたので、これを生かしたいとの発言がありました。

第2分科会の上野氏からは、小谷にも通い始めて何年がたつが、小谷をだんだん好きになってきている、今日茅葺きの先輩を見て謙虚でありたいな、自然に対しても人に対して、謙虚でありたいなと思ったし、小谷からそれを学んでいる気がする、皆さんも一回どこかで茅刈りしてみませんか？との発言がありました。

第3分科会の武生氏からは、今年も祭りに参加して神輿に参加しお酒を飲ませてもらった、これからも関わっていききたい、せっかくの機運を生かしていきたいとの発言がありました。

第4分科会の町田氏からは、今日子供たちが素晴らしい発表をしたのは1年生から勉強していたからで、草原を生かした教育の重要性を感じた、草原を生かしたフレームワークができれば良いと感じたとの発言がありました。

最後にまとめとして、全体コーディネーターの高橋氏から、茅場の維持と茅葺の維持はきわめて合理性が高く、持続性や多面的な価値があることも分かってきた、今後分かりやすい形で茅場や草原をなぜ守らないといけないのかということに対して答えを出さないといけない、これからサミットが終わってから出発点として、小谷村が発展することを祈念していますとの発言がありました。

全体を通して、草原の保全ではなく、正しい形で持続的に利用すること、人が関わることを通して生態系が保全される形を模索している、そういう時代になったのだなという感想を持ちました。利用の形やかかわり方をそれぞれの草原からどのように提案していくか、今後はより他地域の取り組みを参考にする時代が来ているように感じます。皆で取り組みを共有しながらより良い草原の在り方を模索していきたいと感じる全体会でした。

全国草原サミットの報告

(指原孝治：九重ふるさと自然学校)

はじめに

10月5日(土)、草原を持つ12の市町村長等が全国から集い、「全国草原サミット」が実施されました(現地・オンラインのハイブリッド開催)。各地の取り組みや現状、課題などを発表、情報交換を行い、最後に「サミット小谷宣言」が採択され、幕を閉じました。

参加市町村は以下の通りです。

大分県竹田市 大分県九重町 熊本県西原村
島根県大田市 鳥取県江府町 広島県安芸太田町
広島県北広島町 兵庫県神河町 岐阜県白川村
静岡県東伊豆町 長野県白馬村 長野県小谷村



前回サミット報告

前回(2021年)の開催地を代表して、静岡県東伊豆町の鈴木副町長より報告がありました。コロナ禍の中での開催でしたが、草原と人の関わりが生み出した「共創資産」を共に未来に残していくために、保全・利用・継承をテーマにサミットを開催。様々なアイデアが生まれ、非常に有意義な場になりました。また、同サミットを皮切りに「未来に残したい草原の里100選」の募集が開始され、東伊豆宣言の要点として下記が挙げられました。

1. 保全活動の支援
2. 観光資源としての草原
3. 教育文化の調和と継承
4. 草原利用の創意工夫の支援
5. 地域振興に活用できる社会環境の整備

今回シンポジウム報告

ネットワーク代表理事の高橋佳孝氏から、前日の「基調講演」「研究報告」「分科会」「全体会」について報告がありました。これらの内容は他のレポートと重複するので省きますが、特に最後の全体会のまとめの中で「行政への要望」とされた内容が草原サミット参加自治体への提言として強調されました。

各市町村からの活動報告

・大分県竹田市

今回、草原の里 100 選に「坊ガツル湿原」が認定された。久住高原では草原を守る農家の高齢化が進み、野焼きが行われない地域が増え始め、森林化が進んでいる。地元団体と連携して、火入れ技術の伝承や後継者の育成のための仕組みづくりを進めている。

・大分県九重町

飯田高原では実行委員会形式で野焼きを継続している。現在は 600ha まで野焼き面積を拡大。高齢化による新たな担い手、実行委員会継続のための安定的な収入の確保に努めながら、オオハンゴンソウなど外来種の駆除、シカによる食害対策に取り組んでいる。

・熊本県西原村

約 1,000ha の原野で野焼きを実施。阿蘇の気候・地形による風を利用した風力発電が原野に立地し、毎年小学校 5 年生を対象に環境体験学習会を実施。草原と共に自然エネルギーの大切さを学ぶ場として、草原が活用されている。

・島根県大田市

三瓶山における西の原・東の原・北の原で火入れを実施。西の原はオキナグサやキスゲなど希少な草花の宝庫であり、地元小学生による植栽が定期的に行われている。毎春の「クリーン三瓶」ではゴミ拾いとともに入来種の駆除を実施し、景観の維持に努めている。

・鳥取県江府町

鏡ヶ成草原では 4 月に山焼き、5 月に希少種保全の選択的草刈りを行っている。ウスイロヒョウモンモドキの再導入を目指し、オミナエシの苗を草原に移植する活動を開始。町で採用した 4 名のパークレンジャーが、草原の火入れ後継者になるべく育成を行っている。



・広島県安芸太田町

深入山は 250 年前から山焼きが行われてきた。過疎高齢化により、地元自治会から現在は町が主体となり山焼きを実施。町職員、消防団、ボランティアなど約 200 名の人員で 100ha の草原を維持し、観光資源として山焼きをイベント化している。

・広島県北広島町

雲月山ではかつて採草放牧が行われていた。その後、林地化が進み山焼きイベントの開催・中止を経て、2005 年、地元によるボランティア活動で火入れを再開。火入れできない場所は広島県民税を活用し、樹木伐採し、草原に戻す取り組みを行っている。

・兵庫県神河町

砥峰高原では現在、90ha のススキ草原が広がる。山焼きイベントなどを観光資源として活用を進め、交流人口を増やしてきたが、2018 年に山焼きで事故が発生。現在は一般公開していない。活動を担う地域世帯数が 4 割減り、後継者の確保が課題。

・岐阜県白川村

白川郷は合掌造り家屋の茅葺き屋根が 114 棟ある。観光化により茅場の維持は困難になり、茅の大半を静岡県御殿場から輸入。世界遺産登録 20 周年を機に、2015 年頃から村で 7ha の茅場を造成。学校行事などを通じて 5 千束を収穫。茅刈機も導入し、生産性向上を図る。

・静岡県東伊豆町

細野高原は現在、観光利用として草原の保全に注力。課題は山焼きの人材、管理費用(約 500 万円)の財源確保。山菜狩りやススキの鑑賞会の入山料徴収もあるが、維持費には足りない。前回サミット後「細野高原みらい協議会」を設立。草原の管理を担っていく方針。

・長野県白馬村

かつての茅場の多くはスキー場に変化した。北アルプスの湧き水が育む湿原が点在する。湿原は希少な動植物が生息・生育。観光資源として木道設置、小学校の学びの場などに有効利用している。これまでの取り組みが評価され、2023 年に国連ベストツーリズムビレッジに認定された。

・長野県小谷村

過去には 54 の集落が茅場を持っていたが、昭和 30 年代頃から放棄され山林化。現在は 2 ヶ所の茅場で計 19,000 把のカリヤスを採用し、中学生と保護者の茅刈り体験や正月のどんど焼き行事の場として活用。今後は情報発信強化と技術継承の担う次世代

の育成が課題。

意見交換

続いて行われた意見交換では、小谷村より「草原の維持費」について提起があり、各市町村等から紹介がありました。

・**九重町**：野焼き団体への防火帯整備に金銭的な支援を実施

・**神河町**：砥峰高原では土地所有者の兵庫県と神河町が維持管理契約を結び、実際の管理委託を地元自治体に依頼して山焼きを実施。山焼きを継続的に行えるよう、駐車場の整備などを町が支援

・**阿蘇グリーンストック**：阿蘇地域に野焼きボランティア 2,300 人を派遣。事業の財源確保として茅 1 万束を生産。また、熊本県や地元市町村、農政局による年間 2,200 万円、10 年間に及ぶ財源をもとに「草原再生支援システム」を構築

小谷村では行政から維持に関しての支援金はなく、

重い課題を頂いたと認識。県への働き掛けも行ってみたい、との発言がありました。

結びとして

最後に、①「未来に残したい草原の里 100 選」第 4 期募集の案内、②「小谷宣言」の採択、③次回サミット・シンポジウム開催地（大分県九重町）の発表があり、幕を閉じました。

草原を抱える自治体では高齢化によるマンパワーの不足、維持管理に必要な財源確保など、共通の課題を抱えながらも、地域の特色を生かした取り組みや次世代に繋げる新たな管理体制の構築を図るなど、前向きな姿勢が感じられました。

草原を通じて自治体間の交流の輪が広がり、連携が深まることで、それぞれの持つ「共創資産」の価値が地域社会に浸透することを期待したいです。



草原をめぐる動き（2025年1月～2025年4月）

1/8 田島ヶ原サクラソウ自生地の草焼き（場所：埼玉県さいたま市桜区 桜草公園内「田島ヶ原サクラソウ自生地」、連絡先：さいたま市教育委員会文化財保護課）

1/11 乙女高原自然観察交流会⑩（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

1/12 野焼き支援ボランティア初心者研修会（場所：熊本県阿蘇市小里 阿蘇草原保全活動センター「草原学習館」、連絡先：公益財団法人阿蘇グリーンストック）（1/18にも開催）

1/25 若草山山焼き（場所：奈良県奈良市奈良公園内

若草山一帯、連絡先：若草山焼き行事实行委員会事務局（奈良県奈良公園室）

1/25 小貝川の野焼き（場所：茨城県常総市小貝川河川敷、連絡先：自然友の会（水海道市））

1/26 菅生沼の野焼き（場所：茨城県坂東市菅生沼、連絡先：ミュージアムパーク茨城県自然博物館）

1/26 第 22 回乙女高原フォーラム 柵で囲って 10 周年、虫も戻ってきた乙女高原（場所：山梨県山梨市 夢わーく山梨、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

1/26 川内峠野焼き（場所：長崎県平戸市川内峠、連絡先：平戸市観光課）

- 1月下旬 本州最南端の火祭り（場所：和歌山県東牟婁郡串本町潮岬望楼の芝、連絡先：串本町観光協会・串本町役場産業課）
- 1月下旬 都井岬の野焼き（場所：宮崎市串間市都井岬、連絡先：串間市観光物産協会・都井岬ビクターセンター）
- 2/1 自然観察交流会（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 2/8 細野高原の山焼き（場所：静岡県東伊豆町、連絡先：東伊豆観光協会）
- 2/9 大室山山焼き（場所：静岡県伊東市大室山、連絡先：大室山登山リフト）
- 2月上旬 平尾台野焼き（場所：福岡県北九州市平尾台、連絡先：小倉南区役所コミュニティ支援課）
- 2/16 秋吉台山焼き（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台山焼き対策協議会（美祢市農林課））
- 2月中旬～下旬 鶴殿のヨシ原焼き（場所：大阪府高槻市道鶴町淀川河川敷、連絡先：高槻市産業環境部環境緑政課）
- 3/1 渡良瀬遊水地ヨシ焼き（場所：渡良瀬遊水池、連絡先：渡良瀬遊水地ヨシ焼き連絡会・一般財団法人渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団）
- 3/1 自然観察交流会（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 3月上旬 ヨシ焼き（場所：山口県山口市阿知須きらら浜自然観察公園、連絡先：きらら浜自然観察公園）
- 3月上旬 由布岳の野焼き（場所：大分県由布市湯布院町、連絡先：温湯区牧野組合・由布岳景観保全機構）
- 3月中旬 曾爾高原山焼き（場所：奈良県宇陀郡曾爾村、連絡先：曾爾村観光協会）
- 3月中旬 生石高原山焼き（場所：和歌山県有田郡有田川町・紀美野町、連絡先：紀美野町役場産業課・有田川町商工観光課）
- 3月中旬 千俵蒔山の野焼き（場所：長崎県対馬市上県町、連絡先：（対馬市上県行政サービスセンター））
- 3月中旬 防ガツル湿原の野焼き（場所：大分県竹田市久住町、連絡先：坊ガツル野焼き実行委員会・公益財団法人九電みらい財団）
- 3月中旬～下旬 飯田高原野焼き（場所：大分県玖珠郡九重町、連絡先：飯田高原野焼き実行委員会・九重町商工観光・自然環境課）
- 3月下旬 砥峰高原山焼き（場所：兵庫県神河町連絡先：とのみね高原山焼き実行委員会）
- 3月下旬 三瓶山西の原火入れ（場所：島根県大田市三瓶山、連絡先：大田市役所）
- 3月下旬 塩塚高原野焼き（場所：愛媛県四国中央市・徳島県三好市、連絡先：四国中央市観光協会・三好市役所）
- 4月上旬 扇山火まつり（場所：大分県別府市扇山、連絡先：別府八湯まつり実行委員会）
- 4月中旬 寒風山山焼き（場所：秋田県男鹿市、連絡先：男鹿市観光課）
- 4月中旬 雲月山の山焼き（場所：広島県北広島町連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 4月下旬 小清水原生花園火入れ（野焼き）（場所：北海道小清水町、連絡先：小清水原生花園風景回復対策協議会・小清水町産業課商工観光係）

※予定が変更になる場合があります。上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 61 2025年1月号

一般社団法人全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 378-14
大田市ゲストハウス雪見院内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-86-8899

【編集後記】前号に続き、2024年10月に長野県小谷村で開催された全国草原サミット・シンポジウムの様子を報告します。4つの分科会、全体会、そしてサミットと、いずれも充実した内容で、報告下さったみなさまにはお礼申し上げます。現在募集中である草原100選事業など、今年も当ネットワークではさまざまな事業を続けていく予定です。みなさまのご協力をお願いいたします。